

## 小学校低学年における遊戯的体操の試案と保護者に対する意識調査

小山 勇気 (201011913、体操コーチング論)

指導教員：長谷川 聖修、遠藤 卓郎、本谷 聡

キーワード：体力低下、習い事、自由遊び、遊具、保護者

### 【目的】

近年、子ども達が抱える問題として体力低下や「運動する子としない子」の二極化が挙げられる。その原因の一つに室内遊びや習い事の増加によって、遊ぶ時間や遊ぶ仲間が減少したことが考えられる。室内遊びの代表格はテレビゲームである。ヴァーチャルな世界の中で自由に遊び回る事が、実際に身体を動かして遊ぶよりも魅力的であると感じられているのが現状である。

しかしながら、バランスのとれた身体発達のためには、幼少期にスポーツ種目の枠組みやルールにとらわれない、自発的で夢中になって取り組むことのできる遊戯的な体験が必要<sup>1)</sup>であると考えられる。

そこで、本研究は小学校低学年を対象とし、遊戯的な観点を重視した体操教室でのプログラム内容を試案すると共に、教室の指導内容に関する保護者の意見を調査することで、子どもの自発的な身体活動を誘発する体操教室の在り方についての基礎的知見を得ることを目的とした。

### 【方法】

小学校低学年を対象として、子どもにとっての親しみのあるゲームの世界を体験することをコンセプトとした運動プログラムを実施した。遊戯的な観点を重視するにあたって、運動意欲や多様な動きを引き出す「遊具」の重要性に着目し、「ウォーミングアップ」「Gボール」「JPクッション」「トランポリン」「肋木」「滑車遊び」「ブランコ」の7項目のプログラムを考案し、実施した。

さらに、本教室の最終回における最後の25分間は自由遊びとした。この自由遊びの時間では、参加者自身が遊び方や遊びに伴う危険から身を守る方法を考えることができるよう、指導員は最小限の補助を行なった。また、参加者の保護者に対して指導内容に関する意識調査を行なった。

### 【結果と考察】

保護者への調査の結果、以下のことが明らかになった。

1) 「本教室以外での運動に対する姿勢が積極的になったかどうか」という問いに対して、「いいえ」という回答は0件(0%)で、「はい」が10件(45%)を占めた。

このことから、運動に対する姿勢が積極的になったと評価する傾向が明らかになった。

2) 「新しい友達ができただろうか」という問いに対して、「はい」という回答が6件(27%)に留まり、「どちらとも言えない」が13件(59%)であった。このことから、新しい友達ができたと評価する保護者は少数である傾向が明らかになった。

3) 「行動する前に危険でないか考えるようになったかどうか」という問いに対して、「はい」が10件(45%)を占めていた。このことから、半数の保護者が危険を予知する姿勢が身に付いたと評価している傾向が明らかになった。

4) 最終回において設定した自由遊びでは、どの遊具でもこれまで指導員が指導してきた約束やルールを守りながら楽しそうに遊ぶ様子が観察された。また、指導員の介入が減少した中で、互いに協力し合う関係性も観察された。



写真1 自由遊びの様子

### 【結論】

従来の体操教室では、「できるようになる」ことが求められてきた。しかし、体力を向上させることや、技術を身に付けさせることだけが子ども達にとって重要ではないと考えられる。子ども達の運動離れが問題視されている今こそ、勝負や結果ではなく、自分のペースで取り組むプロセスを大切にするべきであるといえよう。「動くことが楽しい」と感じられるような体操指導こそが、生涯に渡り健やかな人生にする鍵であると考えられる。

### 【参考文献】

1) 中村 和彦 (2002) 子どものライフスタイルから見えるもの, 体育科教育 50(3):10-13